

夏目晴雄氏インタビュー

日付 1996年6月14日

場所 防衛弘済会
Boei Kosai kai

村田 ごく簡単に先生のご経歴をご確認させて頂きたいのですけれども。昭和二年のお生まれで、東北大学の法学部をご卒業の後に、当時の調達庁に入庁されて、私は日本紳士録というもので調べさせて頂いたんですけれども、その後に国防会議の事務局の参事官をお勤めになって、それからお覚えでいらっしゃいましたら防衛課長というのは何年だったでございましょうか。

夏目 防衛課長は昭和48年ですね。それから50年までですね

村田 その後、総務課長。そして51年に審議官。

夏目 そうですね。

村田 参事官、人事教育局長で官房長で防衛局長事務次官、そして60年にご退任。最初に、西広先生にですね、去年お亡くなりになる二週間前にお話を伺ったんですが。その時のインタビューの記事を、もしかしたら先生にもご覧頂いているかと思うんですけれども、丸山先生などは少し違った印象やご記憶を持っていらっしゃってまして、宝珠山さんにいたしましても、必ずしも直接的に関わったわけではないけれども、少し違うのではないかとところが若干あるようでございまして、ご存命でしたら、その後出来上がったものをご覧いただいて、ご本人も訂正して頂いたり加えて頂いたりする機会もあったんでしょうけれども、もうそれができなくなってしまったものですから、西広さんがおっしゃったことに関してですねちょっと2、3、先生の御記憶の範囲で質問させて頂きたいのですけれども、あのインタビューの中で西広さんは沖縄返還前ぐらいにですね、防衛庁の内局の中で、内局では西広さんと後一人か二人くらいですか、後、制服の方の小人数のグループで朝鮮有事のコンティンジェンシー・プランを作った、朝鮮有事のいろいろなシナリオを考えた、それを防衛庁の一番上のレベルの会議に持っていったところが、長官や次官がこれは防衛庁全体の意見として出されるとちょっと差し支えがあるというので、西広さんはその後、その自分たちの作った案を外務省からいらっしゃっている国際担当の参事官に渡して、多分そこから外務省にいったのではないかという話をしておられまして、最近また朝鮮有事とかいわれますけれども、あの時、我々はいろんなパターンを考えたのであって、大体基本的なパターンはあの時出ているというという主旨の話をなさっているんですね。先生はもしかして…。

夏目 それは何年頃の話ですか。

村田 沖縄返還前という含みで。

夏目 というと46、7年ということですね。

村田 そうですね。

夏目 彼はその頃何をやっていたの。

村田 防衛課の補佐か何かでいらっしやったのではないのでしょうか。

('46 技本会計課長 '47 広報課長)

夏目 私はその話は知りません。彼がこれをやっていたかどうかは別として、上へあげたという話は聞いていません。制服の人達が中心になって勉強したのは間違いない。ただ、それをどういうメンバーでやったかということであれば、私はたまたまその頃なら国防会議に行っているか、教育課長をやっている頃ですからね。とにかく制服の人達は勉強をしていました。後また話の中で多分出てくるのがそれに関連したことですよ。

村田 かなり広範囲な研究をなさっていたと考えるとよろしいのでしょうか。

夏目 広範囲というより日本に対する有事というのはどのような形で起こりうるかというケースを幾つか挙げて、勉強していたということではないか。それは正に幕僚のスタディの域を脱しなかったのであって、それを上に上げるようなとこまでではなかったはず。ただしそれは上というのは長官ということではなくて、制服のレベルでは相当上まで…。

村田 幕長とか。内局で組織的にそういうことをやったというのは、やっていませんか。

夏目 後でそのことをちょっと申し上げようと思うんですけども、それが一つの問題の契機になるんです。ガイドラインなんかができてる、日米共同訓練を始めたりする一つのきっかけになるんです。それは内容的に制服レベルのスタディとしておくのには不適當であり、名前も正確には忘れましたが作戦計画というような標題になっていてそれは少し穏やかではないのではないかと、しかも防衛庁限りでできる範囲を逸脱した中身まで含んだものを、こういうものがきちんとした計画だと名づけることは本当でもないしまた誤解を与えるということで、その後これを軌道修正していきだんだん日の目を見さしていくというプロセスがあるわけですよ。

村田 その前に三矢計画というのがありましたよね。

夏目 それはずっと前の話ですけども、あれに近いものです。あれも一つのスタディであ

ったものが三矢計画と呼ばれていましたね。しかしあれも幕僚研究で、もともとは研究だったんですけどね。しかし兵隊さんというのはそういうものをやると一つの計画と名前を付けたくなるもんなんですよ。

村田 もちろんかなり幕僚サイドでなされたことで、まして外務省であるとかといったところまでの話し合いまでには全然行ってないんですね。

夏目 と思います。あるいは私の知らないところで、外務省の一部の人に話がいていたかもしれませんが、それは私は知りませんが、少なくともその後すぐ私が防衛課長になっているんですけれどもその種の話は聞いたことがない。

村田 そうですか。先生が48～50年の防衛課長の頃は西広さんは課長補佐でいらっしやったんでしょうか。

夏目 いや、もう外へ出ていなかったです。

村田 ああ、そうですか。

村田 もう一つですね西広先生がインタビューの中でおっしゃっていたことで、あるいはもうご専門の筋では常識なのかもしれないのですが、核のイントロダクションの話でございまして、イントロダクションというのが、日本本土に核兵器をどこかに持ち込んでどこかにあるというのであればイントロダクションとなるけれども、よく言われるように核艦船が通過をするトランジットというのは、イントロダクションとは別なんだというんですね、はっきり言ってらっしゃいまして、ただこれは軍事的にみれば常識だと思いますとおっしゃっておられるんですけれども、防衛庁としましても国会答弁では特にライシャワー発言の後は、ライシャワーさんがそういう事をはっきりおっしゃって、むしろ野党が追及する中で、政府や防衛庁は、いわゆる通過のようなものもイントロダクションに入るんで合わせて認めていないというお立場をとってらっしゃったと思うんですけれども。その辺はいかがでしょうか。

夏目 やっぱりそう、同感ですね。

村田 ああ、そうですか。

夏目 常識だと思います。

村田 常識。

夏目 それは政治的にひん曲げられているから、そういうことにせざるを得ないんで、みんな不自然だ、不自然だと思いつながらまあ、それに従ってたまででね。内心は、まったくナンセンスだっていう意識ですよ。

村田 国会答弁なんかで、核搭載艦船が通過することも広義のイントロダクションになるのであって、日本には非核三原則がある、アメリカは日本の非核三原則を承知しているからやって来るなら外しているはずであるというですね。

夏目 事前協議があるか、外して来るかどうかはわからない。事前協議がない場合は外して来るという前提ですね。要するにそういうフィクションの上に三原則は成り立っていたわけですよ。まあ、それを有り体に言うと当時内閣の一つや二つが吹っ飛ぶという感じでしたからね。そこまではとてもなかなかおっぴらには言えなかったことだけど、だけどみんな当たり前のこととして外務省といえどもみんな認識していたと思いますよ。

村田 なるほど。例えばそういうことについて、アメリカ側との具体的な了解事項みたいなものはあったんでしょうか。つまりトランジットについては国会ではこうふっているけれども実務レベルではトランジットというのはイントロダクションに入らないということを知っているんだという。

夏目 それは我々が防衛庁としてはみたことがないですね。

村田 ございませつか。

夏目 あるいは外務省にあるかないかまでは知りませつかけれども。

村田 お互いに常識として黙って運用していたと考えてよろしいですか。

夏目 だから外務省と核の問題について議論することもなかつたし。

村田 ああ、そうですね。

田中 どうも遅くなりまして、申し訳ございませつか。

夏目 ああ、どうも。

村田 今ですね西広先生のインタビューの内容について2、3疑問点を、例の朝鮮有事のコンティジェンシー・プランの話と核の持ち込みの定義についてお話を伺っていたところです。

夏目 正直に私がそのころよく言ったことは、飲み屋に一杯飲みに行くとき酒を持ち込んで、そこで飲めば持ち込みだけど鞆の中に入れたままその店の酒を飲んでるだけでね、その酒は別のとこ、家に持って帰る様な酒まで持ち込みだ、持ち込みだって言われても困るじゃねーかと言う冗談を言ってたことが記憶にありますけどね。

村田 あの、そうしますと今の話とちょっと関係あるんですが、事前協議ということは何人かの人にお伺いしたんですけども、「事前協議とは何か」という事について防衛庁サイドでははっきりした認識というものがおありになったのでしょうか。例えばホット・ラインで電話がかかってきて依頼があったらそれで事前協議があったという風に考えるのか、あるいは外務省・防衛庁の実務レベルの当局者とアメリカのカウンター・パートが集まって何か会議をやる、そういうのを事前協議とお考えになっていたのか。まあ実際、事前協議というのはなかったわけですからなんとも言えませんけれども。

夏目 正直言って事前協議がどうあるべきかなんて考えたことはなかったですね。それは常識的には会議をもってどうとかという事じゃなくて、多分一方的な通知で来るんだと私は、個人としてはですよ、漠然としかるべきルートを通じて外務省なら外務省に、向こうからそういう文章で来るのか電報で来るのか大使が直接申し出てくるのかは別として、そういう形で来るべきものであって、ここでもって議論して、今日、事前協議があったということにしろとかそんなことではない。いずれにしてもそんなことをあんまり考えて議論したことはないし。

田中 ちょっと失礼します

夏目 まあ、1970年代につきまして、私も関係していることであれば知ってますけどもね、そうでない事もありますからね、そこら辺は、私は全く分からないお答えできないことも多いと思うんです。で、まあ、西広の論文で言うかこの前のやつを、をちょっとみて少しおかしいんじゃないか。私自身が知らないことがあるから多分、誰がいいかって防衛庁で聞きに来るからこう言うことを知っているのは上だったら丸山さんが多少その知ってるかもしれないと、時期的に防衛局長もやっているから、それから宝珠山ってのは当時部員でいただろうから多少どっかで聞いたりして知ってるかもしれない、それ以外は伊藤圭一というのがいたんですけどもね。

1
村田 伊藤先生というのは国防会議事務局長をなさった方でしたでしょうか。

夏目 最後はね。彼は、その70年代の時期どっかで防衛課長なんかやっていますからね。要するに人が2年ぐらいで変わっちゃいますんでね、自分がタッチした、断面、断面は知ってるけれどずれちゃうとそういう意味で分からない。その前後を脈絡付けて話すというのは、なかなか、あるいは食い違いがあるかもしれない。

田中 あの、73年から防衛課長でいらっしゃいますよね。

夏目 ええ、48年から約2年間ですね。

田中 ではその前は、

夏目 その前は教育課長を2年ぐらいやってましたかねえ。そしてその前は国防会議にいたんです。

田中 そうすると防衛課長になられたのは48年の夏くらいからですね。

夏目 多分、そうだと思いますね。定期異動がけいたい5月か6月ぐらいだから。

田中 そうすると「平和時の防衛力」を出せとか言っていた頃ですか。

夏目 もう出た後ですね。要するに、新しい3次防がそろそろ終わって4次防をつくるとかつくれないとか言っていた頃でしたね。その前提が「平和時の防衛力」、前提とかいろいろ事前の段階で議論されたことが「平和時の防衛力」なんかでしたからね。

田中 あの、「平和時の防衛力」の構想というのは私に関して言う限りでは、田中角栄首相が防衛庁長官に出せと4次防をつくったときに言って、それからできたという話ですが。

夏目 いや、「平和時の防衛力」というのはそんな上からの指示じゃないですよ。

田中 そうしますと、これはどういう風に考えればよろしいんですか。

夏目 これは、当時の久保防衛局長という人がおられて、その人が従来の防衛庁の防衛力整備計画というものが非常に問題があるという事で、あの方は考え方が非常に柔軟な人です

からね、当時の脅威対応論という様な防衛計画はなかなか実行不可能だし、現実的にも無理だろう、もっと国民にアピールするものとして違ったアプローチが必要じゃないかということで自ら発想なされたんですね。上から言ってきたというものは純粹に所要防衛力をはじいたらどのくらいになるのという事を、それに付随して指示があった。

田中 それは田中内閣の時にですか。中曽根さんの時に。

夏目 いや、中曽根さんの時とは別に。

田中 それでは4次防が決着ついたあたりで。

夏目 いや、4次防が決着つくつかないかの時だと思いますけどね。それを国会にも発表したと思いますよ。それは本当に大きな防衛力でね。それは本当に脅威に対応というならこれだけのものがあるよと言う様なことを、全くラフな試算ですけれどもそういうことをした。

田中 それはかなり世論からみると反発が強かったのではないですか。

夏目 それは強いですよ。だけどそれは、我々がそういうものをつくろうとしているのではなくて、全くただ計算をするならこうなるよ。だからこれは不可能だ、不可能というか非現実的だっていうことを言いたいためにやったんですね。

田中 当時、久保さんがお書きになったというのでK・B個人論文というのがあってですね、これを庁内に配って議論のきっかけにしたって言う事が言われていますけれども、この辺は防衛課長になれる前あたりからごらんになって…。

夏目 みていましたよ。議論になったっていうか、あまり表立っての議論はしませんでしたけれども、まあ有り体に言うと制服の人たちから猛反発でしたね。全くこれは本来の防衛計画のあるべき姿ではない。ナンセンスだというのが制服の大方の意見でしたね。

村田 制服からの猛反発というのは我々も理解できるんですが、同じ内局シビリアンの反応というものはどういうものだったのでしょうか。

夏目 シビリアンの反応というのはまちまちでしたね。人それぞれで、やっぱりこういう考え方をとるべきじゃないかという事でまあそれに何となく惹かれる人が多かったんじゃないでしょうかね。しかし実際にそういう計画をつくり、大蔵省と財政当局と折衝をし、官僚

1 サイドといいますか政府全体をまとめていくということを仕事とする以上は、それはやっぱりあるべき姿よりも、多分こう言うことで落としどころも考えながらやっていかなければならんということを考えると、そんなところかなと言うところはありませんね。現に私が防衛課長になって、当時、そのまま西広が引き継いで彼がそれを作り上げたわけですけどね、ちょうど坂田道太という人が長官で来られて、やっぱり、あの方は非常にリベラルな人なもんだから久保さんの構想に、相当影響されていたと思います。でそういう風なことの中でもって防衛計画の大綱をつくろうという事だから、だいふいろんな案を作って上に上げた。私が、その当時考えて、今でも共感あるのはね、やはり常備すべき防衛力といざというときに拡大する、その後大綱の中ではエクスパンド条項と言ってますけどね。そういうものと分けて考えようじゃないかという事でやった事なんです。坂田さんもそれでだいたいO・Kだと。しかし防衛計画の大綱というものは防衛庁だけでつくるもんじゃないし、やっぱり国民の支持を得なきゃいけないんで、民間知識者の意見を聞こうじゃないかと荒垣さんとか角田房子さんとか何人かいました。

田中 「防衛を考える会」ですね。

夏目 「考える会」を作ってそこで議論してもらって、そこでまた一年くらい時間が経っていくわけですからね。その発想が、そういうことが前提、それが防衛計画の大綱に多少言葉が変わって使われていくわけですよ。それが基盤的防衛力という名前に変わっていくわけです。

田中 久保さんは次官になられる前は施設庁長官でいらっしゃいますよね。でこの辺の人事の動きというのはどういう風に理解したらよろしいんでしょうか。ですから久保さんという方は、今おっしゃった基盤的防衛力に繋がるような考え方に反対された、途中から防衛局長、その後施設庁長官になられて、それから次官でいらっしゃいますよね。施設庁長官になられたときはまだ坂田さんはいらしゃってない時で、坂田さんがいらしゃってから施設庁長官、事務次官になられたわけですよ。そのあたり、久保さんが施設庁長官をやってらっしゃるあたりってというのは、防衛に対する考え方は、坂田長官が来られた、久保さんは施設庁長官の時にどんな相互作用というのでしょうか、誰が一番影響力があったというのでしょうか。どういうきっかけでそういうお話になったのかを、お聞かせ願えませんでしょうか。

夏目 お答えになっているのかわかりませんが、もともと防衛庁の人事って言うのは非常に乱暴な言い方をしますと、わかりやすく言うと要するに、防衛局長かもしくは施設庁長官で少し苦勞をしてもらわないと、次官で言うわけにはいかないなって言う何となしのムードがあったんです。今でも多少あるかもしれない。例外ももちろんないわけではないん

でしょうけれども。その当時も例外はあったんですが。おおむねそうなんですね。で久保さんの頃の内海さんという方が警察の先輩におられてその方はやっぱり施設庁長官もやらなければ防衛局長もやらないで次官になられた。次官になられたんだが、ちょうど沖縄の返還もってでごたごたして、国会で捕まり、4次防の先取りで捕まったりして、やはりどっかでそういうことをやっていかなければならないんじゃないかという頭があったんですね。今、久保さんはそういう意味では、防衛局長や施設庁長官に行く必要はない、ないんだけど、当時、大蔵省から来ておられる方がおられてどちらかが次官になられると言う形だったのか、たまたまどうということかそこは私は知りませんが、田代って言う大蔵省から来られた方が、先に次官になって多分一年くらいでお帰りになってすぐ久保さん、そういうそのときの人事だったわけです。久保さんは施設庁に行かれても防衛局長、あるいは防衛次官としての事にむしろ関心があって施設庁長官は片手間みたいにしてもらいたんじゃないですかね。

田中 そうすると防衛政策の方針は、防衛庁の中ではそういう方針みたいなものはどういところで議論するんですか。やはり幹部会みたいなものがあるんですか。

夏目 防衛政策みたいなものは、だいたい防衛局で案を作り、もちろん防衛局で勝手につくるんじゃなくて、制服といろいろ議論を重ねながら防衛局がまとめて、それを最終的に庁内の参事官会なり庁議にかけて大臣にあげる。そういう形になるんですね。そういう意味では防衛局長が一番キーパーソンになるんですね。施設庁長官はあまり関係ないんです。

田中 通常のラインからいうとはずれるわけですよ。

村田 施設庁長官は参事官会議のメンバーですか。

夏目 メンバーではないんですけども慣例として入っています。

村田 調本の本部長も入ってますか。

夏目 それは入ってないです。施設庁長官は入っています。しかしそれはテーマによって呼んだり呼ばなかったりですからね。ただ通常呼んでるようですね、今でも。だからそのころは久保さんはあまりタッチしてない。外野でKB論文なんかはそういう形だったと思います。そういうあれがあると思うんですよ。

田中 しかしですね、久保さんの追悼記念論文集の中にやっぱり個人論文ということで94年の夏かなんかに書かれているものがありますけれどもあれはそうすると…。

村田 74年ですね。

田中 あれはちょっとはずれているときにお書きになった。

夏目 多分ですね。はずれてたんです。はずれているときにやはり昔の夢というか、やっぱり非常に防衛局、防衛局長という仕事に興味があったんで、施設庁の個々の基地の問題なんかにはあんまり関心がないんですね。そういうところがあったんですね。変な話ですけども、日米のさっきのガイドラインの話の初っぱなは、あれは私が防衛課長の時もそういう話を始めたですよ。そのとき久保さんは非常に批判的でしたよ。

田中 何ですか。

夏目 日米間のそういう防衛協力みたいなもの始めることに対して危惧の念をもっておられた。

田中 危惧の念をもっておられた。それはなんなんですか、本当に巻き込まれちゃうと思ったんですか。

夏目 よく分からないですね。関心がないわけじゃなくて非常におありになるんですけども、そこでもっとも積極的に賛成していただけると私は思ってた。当時私は防衛課長で、ご相談にいったこともあるんですけどね。防衛局の大先輩として、私自身も久保さんにお仕えしてましたからね。

田中 それは意外な感じがいたしますね。

夏目 意外ですよ。丸山さんの話しを聞かれたんなら丸山さんもそういうことを言われたんじゃないんですか。

田中 同様のことを何かおっしゃってましたねえ。あの丸山次官は非常に積極的だったわけですよええ。

夏目 丸山さんは積極的でした。

村田 丸山局長、夏目課長ですか。

夏目 久保さんが局長の頃はまだ部員でいたんです。だから多分、久保さんは積極的に賛成

なさってバックアップをして下さると思ったら、予期に反して批判的であった記憶があるもんでね、あーっと思ったことはあります。だけどその点については丸山局長・坂田さんのそういう線の意向が通って、今のガイドラインになっていくわけですからね。そういう意味では別にさっきの話とも関連ありますけれども、それで変なというような関係はないんです。全くライン通りの。

田中 ちょっとこの間、丸山さんにお話を伺ったときの印象だと、丸山さんは今度はあんまり基盤的防衛力というような考えに関しては、なんというのでしょうかあれは単なる考え方であって…。

夏目 ちょっとそれは無責任だと思うんですけどね。あの時の防衛局長ですから。こんな事をテープが回っているところで言うこともあれなんですけれども。……だから本当の意味で内心本心から賛成か反対かって言うのは、本当に分からないですよ。さっきのガイドライン、日米防衛協力を具体的に推進しようなんてほとんど反対でした。

村田 ああ、そうですか。

夏目 一番積極的に賛成してくれたのは海上自衛隊でした。

村田 庁内というのは幕を含めてと言うことですか。

夏目 いやいや、幕は反対しないですよ。庁内というのは防衛庁の中。

村田 内局。内局が。

夏目 要するにそれはねえ、一種の国会対策を考えるとときにそんな危ない橋を渡っていいんかいという用心なんでしょうね。

田中 まあ組織としての今までやってきたことからはずれるという…。

夏目 それはそれで私はいいいことだと思うんです。そういうチェックがあってね、当たり前の話ですから。

田中 日米防衛協力についてですね、そういう庁内でですねある種の消極性がある中で、これをやるべきだという風にお思いになるようになったのはいつ頃からでいらっしゃいますでしょうか。

夏目 僕もあれは聞いたことで重複するかもしれませんが、帰ってちょっと年表を書いたんですけれども、昭和50年の3月に参議院の予算委員会で上田哲っていう人がこう言うことを聞いたんですよ。日米間に秘密の作戦計画があるんじゃないか、それは日本の横須賀とミッドウェーとフィリピンかなんかの三角水域を海域分担をして日本が守ることにしてると、それはゆゆしき集团的自衛権行使に繋がるんじゃないかという様な指摘があったんですよ。そのときはちょっとびっくりしました。普通だったらそんなものはありませんし、とんでもないって事で終わっちゃうんですけれども、それで偉いと思ったのは、当時の坂田長官は非常に学者的な雰囲気を持ちながら「これは、今はないけれども、本来は必要なものじゃないか。この種のことは。ちょっとこれを積極的に頂こうじゃないか。」っていうような言い方をされてね。そうしてこれは、今のところそんなことは考えたことはないけれども、計画なんかないけれども、本当は必要なことで、すぐにでもアメリカとそういうことの相談をすべきだと思うというような、前向きな答弁をして相当大きく採り上げられた事があるんですね。それは上田哲先生はこんな事を聞いて妙なものを引きずり出した事になるんですけれども、その背景としてさっきちょっと申し上げた坂田さんの頭の中には上田哲の質問はきっかけではあったんだけど、正直に言いますと幕僚の中で密かにというわけでもないけれども、アメリカとの間でそういう研究を秘密に重ねてたんです。それはそのもちろん、その他に日本の独自の防衛計画というものはあるんですけれどもね。それはアメリカの支援や来援を前提にしているけれども、それは全くの絵に書いた餅で米軍が来ると見なすというように片を付けていたわけですよ。それじゃあいかんというのがみんな頭の中にあるもんですからね。日米間でそういう話をしてたわけですよ。それは主として在日米軍であり、あるいは太平洋軍がせい一杯で、ペンタゴンが直接関与していると言うほどのものではない。全く制服の、幕僚レベルの研究会みたいなもので、しかしそれが各研究会で話し合ってたっていいんですけれども、そういうことが再三重ねられて、その中にいくつかのケースがあるわけです。こういう場合、こういう場合ってね。それをやっている内にそれが何となくね、計画ということになっちゃうんですね。それは計画でもなんでもない、大騒ぎされるもんじゃないんだけどそういうものがあるんです。それはいかんと、防衛庁の守備範囲を超えることもありますからね。日本政府全体として考えなきゃならんと、あるいは法律改正をしなければできないことすらあるわけですから、こういうものこそちゃんとしたシビリアン・コントロールとか政治のコントロールの下できちんとしたかたちで済々として進めていく必要があるんじゃないか。上田哲の質問をきっかけとしながら、そういうことも併せてこの際クリアーしていこうという、坂田一流、政治家一流の狙いがあってこれは一つ積極的にやろうじゃないかという事で答弁をした。そしてすぐ後、三木・フォード会談つながら、それで防衛関係の当事者の話し合いを進めようじゃないかという風につなげていくわけです。もうご存じだと思いますけど、坂田・シュレジンジャー会談になってガイドラインとか日米防衛協力小委員会に進んでいくわけです。だから発端はまさにそういうことなんですよ。

村田 しかしアメリカ側からの積極的な働きかけというのはほとんどなかったのですか。アメリカ側のほうから、そういう日米協力についての話し合いを進めようという。

夏目 それまではなかった。もっと前からは多少はありましたよ。だけどそんな熱心なあれはなかった。でまあ、アメリカはまだ正直言って、日本に対する大きな期待はなかったんですよね。またもう一つ言えることは、たまたまタイミングが良かったんです。それはどういうことかという、アメリカはベトナムでもって非常に疲れておって、アメリカの防衛予算、国防予算が苦しくなってくる状況だったんですね。確か1975年にベトナム戦争が終わったというか

田中 サイゴンの陥落ですね。

夏目 その時に初めて、多分この前後で、カーターかなあ、カーター時代かな。カーターになって多分そうだと思うんですけど、アメリカの国防予算は減る、ソ連はどんどん増えてるそういう時期でもって、しかもなんかその、私は前後はえてないんですけどもアンゴラとか…。

田中 そうですね75、6年アンゴラ。

夏目 なんとかいっぱいあって、ユニフォームが手を焼いてる時期と多分一致したんじゃないかと、そういう時期でアメリカだけでもって対処していくのは困難だと。やっぱり自由主義圏諸国には、それぞれの地域の安定みたいなものは、自分たちで努力してもらわないといかんのじゃないかという事を、漠然と考え始めた頃に、今のガイドラインの話を上げていった、アメリカが非常にそれを多としたという記憶がありますね。

村田 アメリカとおっしゃる場合は、この段階では完全にペンタゴンサイドですか。

夏目 ペンタゴンですね。ペンタゴンというより大統領のお墨付きさえ得たかたちになった。

村田 そのころは、先生はそういう話が進んでいた頃は、防衛課長でいらっしゃったわけですよ。そうするとそういう話し合いの言うならば、実務レベルでは最前線に立たれたおひとりですよ。どうなんですか、アメリカサイドと話をされたときにもしご記憶の範囲でアメリカ側のカウンターパートってどういう人だったのでしょうか。ペンタゴンサイドで、アブラモビッツとかそういう人でしょうか。

夏目 アブラモビッツも居たんじゃないかなあ。ウエストとかね。何しろアメリカは年中や
ってるからね。ちょっと今はでてこないね。

村田 ああ、そうですか。分かりました。

夏目 誰か覚えてないかなあ。外務省の局長は反対でしたね、そのことに対しては。あの
名前を出しても変なんだけれど、当時のアメリカ局長あたりは消極的でやばいんじゃない
かみたいな感じをもっておられました。多分、私の印象では東郷さんが次官になってから
かなあ。

田中 75年、次官ですね。

夏目 あの方が次官になって外務省の空気がぐーっと変わって来るんですよ。で、本件につ
いて防衛庁をできるだけエンカレッジングというか支持していこうという空気に外務省もな
って……。そういう記憶がありますね。

田中 この時期は、75年で、まあ76年に大綱と、1パーセントというのが76年の秋だ
と思うんですけども、その次の防衛白書は基盤的防衛力構想というものを非常に詳しく
説明されるわけですけども、その当時はなんというのでしょうか、それから後を見ると
ソ連の軍拡がどんどん大きくなると、時代遅れであると言う意見が大きくなってくると思
いますけど、ソ連の軍事力の増強というのは76、7年にかなりもう見えてきてたんじゃない
んでしょうか。

夏目 見えてきてたんですけどね。アメリカはまだ正直言ってアメリカの話はベトナムの
戦争の厭戦空気っていうんですかねえ。そういう空気でもってなかなかソ連の軍拡に対抗
なんかしようと言う気持ちにならなかったと思うんです。やっぱりレーガンが……。レーガ
ンはいつからでしたっけ。

村田 レーガンは81年からです。

夏目 56年ですか。その前にアフガニスタンの侵攻というのが54……。

村田 79年のことですから、54年の暮れですね。

夏目 そこで初めてアメリカは目が覚めるという感じですね、私の印象では。その年のS C

Cがあったんですけども、そこで少しいかなくなつて気持ちの事を言ってきた記憶がありますよ。だけどそのころまだねえ、ちょっと対岸の火事みたいな感じでしてね。アフガンでもって初めて、これはいかんて慌てだしたという感じですね。それがたまたまレーガンになって、要するにレーガン政権というのは「強いアメリカ」というのを標榜してやり始めたけど、いかんせん独力だけでは手が回らないから言うことになって、やはり応分の努力というものを確保するという事を各国に期待するようになった。

田中 そうすると、ガイドラインができたあたりだと、まだそれほどソ連脅威というものはあまり…。

夏目 ないです。正直言ってまだないです。それよりちょっと前ですからね。

村田 カーターの時の在韓米軍の撤退などと言うのは、防衛庁は非常に深刻に受け止められたのですか。

夏目 そう、そう、そう。変なやつがいるなと思って。

村田 それは組織的に抗議をされるとか意見具申をされるとかはなさったんですか。

夏目 私は抗議をしたっていう記憶はありませんけどね。しかし、これはゆゆしき問題じゃないかとして、だいぶ中で議論した記憶はあります。特にカーターさんてのは、我々の中であまり評判よくなかったです。やっぱりレーガンが初めてねえ、本当に防衛って言うか、世界の安全保障を考える大統領ができたなっていう印象でしたね。

田中 まあ、それまでは、ニクソン政権末期からはウォーターゲートでアメリカの中に真っ当な方針があるかどうか分からない時期になってますよね。

村田 ガイドラインのことでもう一つお尋ねしたいんですが、今までお話を防衛庁の方々に伺った範囲ではガイドラインでそのうち研究が始まりますよね。で、一つは日本有事の研究で、それから極東有事の研究、日本有事の研究は我々が聞くところでは比較的進んだけれども極東有事の研究はそれほど進まなかった。

夏目 ほとんど進んでいない。

村田 今までですね、西広先生を含めてお話を伺った範囲では極東有事が進まなかったのは主幹官庁が外務省になっていて外務省はそういうことにあまり熱心ではなかったことが

一番…。

夏目 私もそう思います。熱心でなかったというより外務省だけでもできないからね。各省にまたがる話でしょ。外務省もなかなか毎日降りかかる火の粉を払うので精一杯でとてもそんなところまで腰を落ち着かせてやるようなスタッフを揃えておくことは…。

あれやる人はみんな安全保障課なんですよ。そんなことまでやってる余裕がなかったもんだから。しかしアメリカは正直言いますと日本有事なんて真面目に考えてないんですよ。最初っから、我々も考えていないんです。考えてないけど、やっぱり立場として日本の防衛のことを考えるときに、日本の有事のことをこっちにおいといて議論するというのは、これはちょっと国民に対しても通りにくい話なんですね。これはこれでやるけれどもこれはもっとアメリカ側からみてバイタルだって事は百も承知なんだけれども、アメリカは相当がっくりしとるんです。ガイドラインはできたけれども本当にやりたいことは二の次三の次にされた。

村田 我々も本当は大事だと思ってなかったおっしゃるのは、専門的な立場から考えると日本単独有事なんてあり得ないと…。

夏目 あり得ないと。私は元々日本の防衛力なんてのはアメリカの補完兵力でいい、要するにまさに国際分業ぐらいに徹していいと思ってるんです。だからあえて海上自衛隊なんてまさにその方向に来てると思うんです。あれは対潜作戦なんてことばかりを一生懸命やってる。それは非常に片寄ってますよ、海軍としてはね。だけどやっぱりアメリカが世界中に広がっている兵力をもっていれば、そんなものは皆アメリカに任しておけばいいですよ。ただ第七艦隊、太平洋艦隊なんかは好き勝手に動けるようにしてやるという事が、日本としてできるということがいいことなんです。

田中 アメリカががっかりしたことについてですね、アメリカはどうしてもうちちょっとこ強くこっちにやってくれていわなかったんですか。

夏目 アメリカもねえ。日本の国内事情を非常によく知っているから無理強いみたいものをするのは極力さげましたね。日本の立場を尊重しながら、我慢強く時期を待っていたっていうんですかねえ。そのかわり手を変え品を変えていろんな言い方をしてアプローチしてきますよね。

田中 実際、だいたい主に80年代といいましょうか夏目さんが防衛局長、次官あたりの頃のご印象と受け取ってよろしいんでしょうか

夏目 そのころになって日本のガイドラインによる研究がね、そっちのほうはあんまり進まないで日本有事みたいなものが先行して来るとアメリカはそれはそれで覚悟してたんです。やっと日本もパートナーとしての機能を果たすようになったかといって大いにお世辞は言ってましたよ、言ってましたけど内心は極東有事のところにあったと思うんです。だから、たまたま防衛局長になってから、いろいろその話をしてみるとやっぱり文句が出て来るんですね。今度、どういう言い方をしてくるかという、極東有事をやれとは言わないけれど朝鮮有事、朝鮮でなんかあったときに日本はこういうことができるか、あれができるかっていうことを具体的に、そのために今の日本の防衛力は少しおかしいんじゃないかという言い方をしてくるんですよ。それがシーレーンの研究に繋がっていったり、インターオペラビリティになったり、技術の相互交流になったり、強いてはF S Xのああいうところに繋がっていくわけですよ。首尾一貫してるんですよ。最初は予算を増やせとかね、前年度の伸び率をもっと増やせとかいうような言い方をしてた、それがだめだとなると、今度は違う言い方でアプローチをしてくる。だけど所詮みんな狙いはどっかで一緒になるようなことなんですね。日本がアクセプトするような言い方を常に考えながら言うてくるという感じですね。

田中 やっぱりそれで日本ができること、できることでまだやってないことをプッシュしていこうというような話ですかね。そうするとガイドラインの面でいっても依然として五条事態についてもまだできることがいっぱいあるからいきなり六条事態でびっくりさせてもしょうがないと。

夏目 まあ、そんな感じですね。正直言って。

村田 対日防衛増強圧力ということに関しましてですねカーター政権と、レーガン政権はずいぶんとアプローチの印象が違ったという感想をお持ちになりますか。

夏目 ちょっとねえ。カーター政権だけは確かねえ、数字の話が多かった。例えばねえ、アフガニスタンの侵攻があってそれで防衛力増強みたいな事を言い出すようになったんですけどもね。その直後、大平・カーター会談ってのがあるんですよ。あのとき初めて防衛力増強のペースアップを求めてきた。それもご存じですね。それまでは何となく一般的になんとか努力してくれという事は言ってきたけれども、具体的に数字を上げて言ってきたのはアフガンの後なんですよ。多分、ブラウンが来たときにもなんて言ったかなあ「ステディ・アンド・シグニフィカント」ってそんなことを言って葉っぱかけてきた。それがありますよね。それで中業をもっと早くやれだとか、一年前倒しにしろだとか、大綱は時代遅れだとか、そんな事をべらべら言うてきましたね。

田中 その時は大綱との関係でどういう風にやっていけばいいとお考えになりましたか。

夏目 大綱はだめだ、大綱は時代遅れだってのはまずアメリカの基本的な認識なんです。それはおかしいじゃないかと、だけどそれは言うべくしていても日本政府として大綱がだめだというのはのって来るような話ではないから大綱は早くやろう、そしてその次にいこうじゃないかと言わんばかりの言い方ですよ。だから毎年毎年、二桁伸ばせとか、よくまあ入れ替わり立ち替わり言って来たという印象はありますね。

田中 そのころはアフガニスタン侵攻の後のソ連脅威論の本をぱらぱらとみると、制服出身の竹田さんとか、その他いろいろな人がご本ををお書きになってらっしゃる。今おっしゃったアメリカが言ってるのと全く同じ様なお発言をなさってますね。大綱は間違っているとか、基盤的防衛力という考え方はそもそもおかしいと言うような議論をなさってますけれども、これは庁内、防衛庁の中の制服の方々の主流の見方はそうだったと言っていいですか。

夏目 そうでしょうね。